

しば子先生の

ミ

ニ

ミ

ニ

芝生教室

第49回 養分量



先生：窒素の二つの形態、アンモニア態と硝酸態窒素については良く分かったかしら・・・

生徒：はい、アンモニア態窒素は土壌粒子に付着して長くとどまり、芝生が必要とする量だけ安定して吸収されて、しかもすぐに光合成によって成長に使うことができる窒素形態なのに対して、硝酸態は土壌から流亡や脱窒を起こし、しかも急激で必要以上に吸収された上に植物が自力でアンモニア態に戻すので利用するのに負担がかかります・・・

先生：よくまとめたわねその通りよ・・・窒素の施肥は芝生には最も重要でしかも多量に必要とされる養分だけとても管理が難しいのね・・・特に日本のように高温多湿で土壌微生物の活性が高い地域では施肥した窒素が短期間で土壌から失われて欠乏状態になったり、時には過剰に吸収されたり、芝生に安定して吸収されにくい特性があるわ・・・そのために窒素成分を安定して芝生に吸収させるための肥料技術が開発されているのね・・・

生徒：確かに土壌微生物が今何やってるかなって人間にはわからないですからね・・・

先生：その通りね・・・窒素肥料を様々な技術で、いわゆる「緩効性肥料」にして植物に安定的に吸収させようとしているのね・・・

生徒：ところで実際のところ植物に必要な養分量ってどのぐらい必要なのでしょうか？

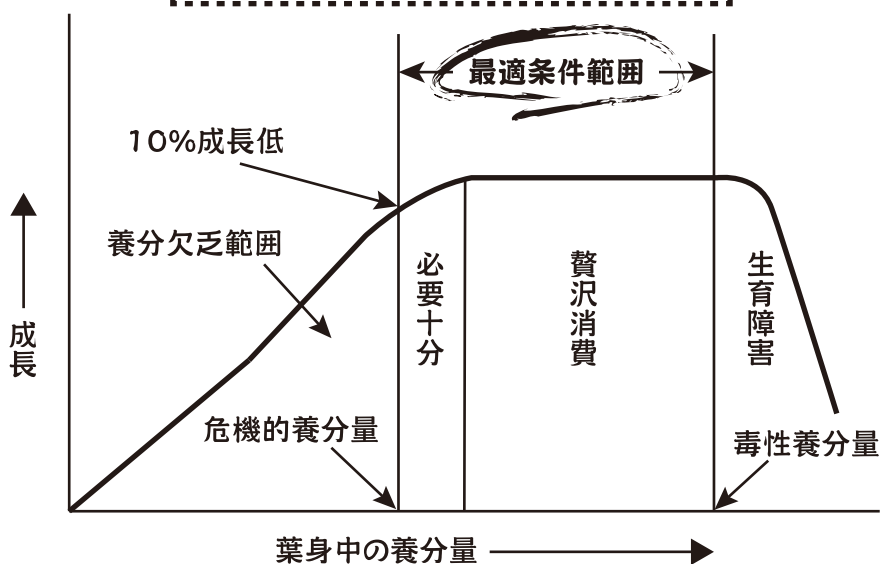
先生：それは芝生の種類によっても違うけど基本は一緒・・・良く勘違いしているけど『施肥量』＝『葉身中の養分量』ではないということ・・・施肥した養分は必ずしもすべてが植物に吸収されるわけではないので、植物の健全性を正しく評価するためにはあくまでも

実際の「葉身中」の養分量を基準にしないといけないということね・・・

生徒：確かベントグラスの場合、葉身中の窒素は 4.5 ～ 6% が十分量ということでしたね・・・

先生：その通り、図を見てわかる通り最大成長より

葉身中の養分量による芝生の成長能力



10%低い点から上が最適な養分条件範囲・・・窒素が4.5%以下の窒素欠乏している条件下で現れる目に見える兆候は、『古い下葉が枯れて来る』、『芽数が減る』、『緑色が淡くなる』、『葉が細くなる』などの症状・・・緑色が淡くなるのは葉緑素が低下している状況ということね・・・

生徒：そうでした、以前習いました・・・そのために葉色度計を使って調べるんですね・・・

先生：そのとおり・・・窒素だけでなく植物に必要なすべての養分（元素）が土壌に十分に、しかも植物が吸収できる状態で用意することが最も重要ということよ・・・土壌分析もせず中身もわからない肥料を適当に施肥して達成できることではないわ・・・



しば子先生への質問や励ましのメールはこちらへ・・・
shibako@hugh-enterprise.co.jp